
雪に願いを (現代もの)

仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪に願いを （現代もの）

【Nコード】

N0397Q

【作者名】

仁

【あらすじ】

俺（武田）は職場の佐々木が気になるが、手を出せない。
天然な佐々木はその気もなく俺に構ってくるが、ある年のクリスマスイブ、佐々木が落ち込んでいて……。

男性同士の恋ではありますが、そういう描写はありません。
申し訳ございませんと言うか、ご安心くださいと言うか。

（前書き）

ミクシィコミュニティにおけるお題小説です。
歴史ものではないかもしれません。

目が離せなくなった。あの時から気付けば視線は彼を追っている。でも彼と目が合ったら自分の気持ち がばれてしまう様な気がして、急いで逸らさずにはられないのだ。

会社で書類整理をしていた時、あまりの疲労に頭がぼうつとして不用意にダンボールの山から中ほどに積んであったものを引き出してしまった。途端に箱は崩れはじめ、雪崩が俺を襲った。

打撲やすり傷、骨の1本程度は覚悟した時、仰向けに押し倒されて誰かが覆い被さってきた。箱がその人を直撃する鈍い音が幾度も聞こえ、その度に俺を護っている人の顔が歪められた。

「おい、大丈夫か」

雪崩が収まると俺は起き上がろうとした。しかし彼は動かない。

「少し……もう少しすれば動けます。ほんのわずかだけ待って下さい」

俺は運動神経がいい方で、腹筋も背筋も毎日鍛えている。彼の下から抜け出て助け起こした。

「無茶するな、佐々木」

「ですが、あなたの方が職場に必要な人間です。あなたがいなくなったらこの部署は回りません」

佐々木は気丈に笑って見せた。

「佐々木、馬鹿。笑い事か」

俺はとげとげと言ひ募った。

「俺だってお前のひと月前に入社してまだ3ヶ月くらいしか経っていないんだ。それにお前には彼女がいるんだろう？ 何考えてる」

「会社の事ですよ」

その答えがなぜかぐさつと俺に突き刺さった。

「お前の方が俺より10歳近くも若い。そういう意味では俺より会社に必要な人材だ。俺は中途採用で、つまりは前の会社に捨てられた人間だ。俺に過大な期待をするな」

そう言っただけでも言わずにいらいと席に戻ったのが約半年前、爽やかな風が吹く5月だった。

「あ、赤べえ」

朝礼前、隣の席の佐々木が俺の携帯ストラップに目を留めて呟いた。「知ってるのか？ 福島のキャラクターだ。郷土玩具の赤べこなんだぞ。会津藩が好きでな、会津にはけっこう何度も行っているんだ」今日の会話のきっかけを探していた俺はその小さな呟きに飛びついた。

「僕も日本史、好きです」

佐々木が無邪気に答えた。

あれから少し経って、きちんと謝ってお礼を言ってから、佐々木とは何となく一緒に仕事する事が多くなった。もちろんパソコンを使った個人作業が基本なのだが、少し大きなプロジェクトが動き始めているから、自然打ち合わせも多くなる。俺はこの件で責任者を一任されていて、佐々木は特にキャリアはないものの、非常に頭の切れる男だから何かと相談してしまう。そうすると結果一緒にいる事が多くなり、上層部からは隣の席にしろ、と席替えまで命じられてしまった。俺もまだヒラだし、なぜこんな責任を負わせてもらえたのか分からない。でも佐々木からそれだけ認められて期待されるんですよ、と笑顔を向けられると、そうなのかもしれない、とだらしなく口元が緩んでしまうのだった。

あの時、佐々木に大きな怪我はなく、軽い打撲だけで済んだのだそう。見た目は華奢だが、案外強靱なやつなのかもしれない。

「そうか。じゃあ今度どこか日帰りで行かないか」

「はい、是非とも」

つくづく自分に犬のしつぽがなくて良かったと思う。明らかに彼を見た時だけ激しく振れるだろうから。今だったらもしかしたら千切れたかもしれない。しかし別に佐々木が好きだから相談していたわけではないし、いまだに雑談だともともに目を合わせられないのが仕事モードになるとしつかり目を見て話せるところを見ると、俺はかなりオンオフの使い分けが巧いのもかもしれない。

「オフィスの少し裏に行くとすぐ江戸城です。今日のお昼にでも散歩に行きませんか？」

佐々木の積極的な提案に俺は目を見張った。

「あの……都合が悪いなら次の機会にいいですが」

あまりの事態に俺が何も言えないでいると、佐々木が遠慮がちに言ってきた。

「いや。都合が悪くても合わせる……」

呆然と言った俺に佐々木は、くす、と笑った。

「無理はしないで欲しいですけど……じゃあ決まりですね」

そんなこんなで俺たちは昼休み、江戸城に行く事にした。皇居、と言わないあたりがいかに歴史バカっぽい。

「コンクリートジャングルって言っても空はあるんだぞ」

昼休み、俺は内心うきうきしながら佐々木と肩を並べて歩く。

「フクヤマがそんな歌を歌ってましたね」

佐々木も空を見上げながら笑う。

「ああ。綺麗な秋空だ」

「そうですね。あの雲はいわし雲っていうのかな」

ビルの林を抜けるといきなり生い茂る緑が見え、空が広くなる。江戸城だ。堀には白鳥が2羽、優雅に泳いでいる。

芝生に座り込みながら俺たちは優雅にランチをとり始めた。

「ねえ、武田さん、今日は下の階のレストランに行きませんか？」
クリスマスソングがやかましく流れ始めたある日、佐々木が目をき

らきらせながら誘ってきた。

「構わないが。俺なんかでいいのか？」

このビルの1階にあるカフェレストランはお洒落なイタリアンを出す店で、カップルらしき男女をよく見かける。

「なんか、じゃなくて、武田さんがいいんですよ」

佐々木に下心も俺に対するそういった好意もないのは分かっている。ただ単に行きたいだけなのだ。切れ者のくせに佐々木はどうもそういった事には疎い。同僚の女性が生なを作ってもまるで気付かずにごく普通の対応をするので、最近では佐々木くんには女性の魅力を感じる機能がないのだ、とか何とか、ずいぶん勝手な噂が広がってきている。

「あそこ、ガラス張りでしょう？ 今ちようどイチヨウが綺麗なんですよ」

確かに街路樹のイチヨウ並木が見ごろだ。佐々木と黄葉と、両方眺めながら優雅にイタリアンもなかなか洒落ているではないか。俺は承知した。

さあ、と一陣の風が枝を揺らした。黄金色のイチヨウが、ぱあつと散っていく。

「わあ……」

窓の外を見て笑った佐々木の顔はひどく幼く見えた。

「それにしても、何だか紅葉が年々遅くなっている気がするんですが」

パスタを器用にスプーンの上で巻き取りながら佐々木が言う。

「ああ、俺もそう思う」

「小学校時代が箱根の山の上だったからかもしれませんが、紅葉って11月なんですよ、僕の中では。12月には落ち葉を集めて芋を焼くんです。だから、この時期にイチヨウがまだ散りきっていないのが信じられないです」

俺にはこの佐々木の純真さが信じられない。こんなにうっとりと見

つめられても、まるで平気で喋っている。——いや、鈍感なのか。

「武田さん？」

佐々木が顔を覗き込んできた。

「具合悪いですか？ 悪かったなあ、そんな時に振り回しちゃってしゅんとうなだれてしまった佐々木に俺ははつと我に返る。」

「いや、すまん。ちよつと考え事をしていただけだ」

「考え事をしなきゃならなかったのに、連れ出してきちゃったんですかね」

どこまでも鈍感で仔犬みたいに耳を垂れて反省している佐々木に俺は苦笑した。

「嫌だつたら断るさ。そこまで気を回さなくていい」

「そうですか？」

おずおずと上目遣いに見やってきた佐々木は、天性のたらしなのかもしれない。

いよいよクリスマス商戦が激しくなってきた。街はイルミネーションがまたたき、デパートではサンタやトナカイの着ぐるみがよろよろと歩いている。オフィスにはそういった華やかさこそないが、師走らしくばたばたした雰囲気漂っている。

昼休み、どこかに行っていた佐々木が俺の隣のデスクに帰って来た。ずっと下を向いている佐々木を俺は無言で見守る。

佐々木がしばらくしてぽつりと俺に告げた。

「すみません、少しそこにいてもらえますか……あと5分で立ち直りますから」

そのまま机に肘を突き、佐々木は静かに泣いた。何も打ち明けてはくれなかったが、強く頼られているのを感じて俺は幸せだった。

「やべ……」

俺は企画の重大な欠点に気付いて青ざめた。急いで佐々木に小声で相談する。

「あー……。そうですねえ、じゃあこれをこっちに持ってくるとか」書類をとんとん指差して、佐々木が素早く答える。

「それは俺も考えた。でも、それだとこっちが立ち行かないんだ」俺と佐々木はしばらく顔を寄せ合って唸り、諦めて緊急会議を開く事にした。

「あーあ、こんなんじゃ俺は責任者失格だよ」思わず俺はぼやいた。

「失格じゃないですよ、欠点に気付けたのは武田さんだけなんですから」

佐々木がにこつと笑った。

「これからです。僕たちもせいっぱい努力しますので、武田さん、見捨てずに引っぱっていつて下さいね」

他のプロジェクトメンバーも口々にそう言って慰めてくれた。

「すまん」

俺は深々と頭を下げ、パソコンで会議室の予約状況を確認し始めた。「ふうん。無能なリーダーにしっぱを振ったって何もいい事ないのにねえ」

のほほんと隣の部署から飛んできたその陰のある言葉は、俺の横で書類を睨んでいた佐々木を一気に沸騰させた。がつ、と手近にあったワイヤレスマウスを掴み、佐々木は腕を振り上げる。

「佐々木！ 精密機器を投げるな」

思いがけず冷静な声が俺の口から出た。

「お言葉ごもつともです。ですが、これから改善策を検討すれば何とか解決できそうです。ご心配ありがとうございます」

俺はわざと過去形で言っただけで会話を断ち切ろうとした。しかし相手はよほど日ごろのうっぷんが溜まっていたのか、ねちねちとしつこく絡み続けてくる。だんだん他のメンバーも頭に血が上ってきて、陰悪なムードが漂い始めた。他部署から好奇の視線が注がれる。

「事を構えたくはありません。でもうちの逸材を傷付けるのだけは許さない」

佐々木が俺の前に立ち塞がった。普段は頼りないくらいの華奢なその背がひどく男の力強さを感じさせた。

「そちらもいらいらされているのは存じております。ですが、これでは業務が滞ります。お互いもう仕事に戻りましょう」

会議室に空きがあり、すぐに社内ネットで一室を押さえられた俺はそう言つてメンバーを促し、その場を離れた。

「願わくばマイナス同士助け合つてプラスになつて欲しいものなんだが、まあ人間関係はたいていマイナス掛けるマイナスは激マイナスなんだよなあ。ま、俺がめっちゃマイナスなのが諸悪の根源なんだが」

溜め息をつきながら俺はぼそつと呟いた。

「……プラスにマイナスが突つかかるからマイナスになつてしまふんではないでしょうか」

佐々木が振り返つてまだぶつぶつ言っている中年サラリーマンを睨み付けながら答える。

「佐々木？ 俺を褒めてくれているのか？」

俺は一気に嫌な気分が吹き飛んだ。

「なら掛けるんじゃないやなくて足せばいいんだ。マイナスにプラスを足せばいくらか良くなるぞ」

俺は笑つた。佐々木がこんなにも自分の味方でいてくれたと思うだけで怒りが静まるなんて、現金なものだ。

「……そういう風に発想の転換ができるのがあなたらしい」

ふう、と息を吐き出した佐々木は俺に笑顔を見せた。

クリスマスイブ、世間では恋人たちのデートの夜だ。しかし俺には相手がいない。あと2年もすれば花の30男なのに、そんな甘い時間を過ごせる気配すらない。

「あーあ、お前は彼女がいるんだろう？ 佐々木。俺の分まで存分に楽しんで来いよ」

終業時間より1時間遅れて仕事を終えた俺はパソコンをシャットダウンしながら伸びをして、帰り支度をしている佐々木に言った。

「ちょうど明日は休みだしな、徹夜してもいいだろうよ、若人よ」
なかばやけになってパソコン画面を見つめたまま言った俺に、なぜか佐々木は無言だった。

「どうした？ 暗い顔して。お前らしくもないぞ」

振り返って佐々木の顔を見た俺はようやく異変に気付いた。佐々木は唇を噛みしめて俯いていた。

「何だ、振られでもしたのか？ なら俺が慰めてやる」

「あー、武田さんたら、オオカミになるつもりー？」

プロジェクトの紅一点、及川がけらけら笑いながらからかってきた。どうもこの同年齢だがベテランの雰囲気漂わせている女性には口では叶わない。

「馬鹿。そんなんじゃない」

どきつとしたが俺は眉をひそめて見せた。そもそも佐々木に無理強いないなんかしたくもない。

「慰めるというのは冗談だ。愚痴を聞くくらいしかできないだろうが、誰にも喋らないで1人で落ち込んでいるよりいくらかましだろう。佐々木、俺は予定がない。それこそ徹夜でもして話を聞くぞ」

佐々木が小さく頷き、2人で退社する。

俺は落ち着いて話ができるレストランを歩きながら探し出して佐々木と90度の位置に座った。本当は横に座った方が人間は打ち明け話をしやすいのだそうだが、そういうテーブルがないのだから仕方ない。

俺はなぜだか知っていた、佐々木の好きなロゼワインのボトルを1本注文し、あとは適当にいくつかの料理をオーダーした。

「彼女に振られた。もう付き合いきれない、って。仕事仕事、仕事
が恋人なの？ って愛想を尽かされた」

無言でグラスを空けていた佐々木がしばらくしてそう打ち明け、くつ、とグラスのロゼワインを煽った。

「仕事が楽しいのは確かだ。武田さんから相談してもらえるようになって、一緒にいろいろ切り拓いていくことにやりがいも感じてきている。それに仕事をしなきゃ生活できないじゃないか。何なんだ、私より仕事を選ぶのね、って台詞はっ！」

佐々木は、どん、と机を叩いた。料理が運ばれる前だが、ハイペースで注がれたボトルは既に空になっている。

「雨だなあ、佐々木」

俺は窓の外を眺めながらのんびりと言った。

「こここのところ温暖化でホワイトクリスマスはとんどご無沙汰だなあ、と涙に濡れた顔に微笑みを向ける。

「天気つてのは雨の時もある。嵐だつて竜巻だつてな。でも、お前がどんな天気だろうと、お前はお前だ。いつだって愛してる」

「え」

佐々木は顔を上げた。

「何だ、気付かなかったか」

俺は柄にもなくウインクして見せた。強いはずだが少し酔っているのかもしれない。

「叶わぬ恋さ。とことん一方的な、な。だが、なあ知ってるか？ 忍ぶ恋こそ最上の恋、ってんだ、男同士は」

「……葉隠に出てきた」

佐々木が笑顔を見せる。

「『恋死なん後の煙にそれと知れ』」

「『つひに漏らさぬ中の想ひは』」

俺は佐々木の上の句を引き取って笑った。

「俺は今漏らしてしまったがな」

佐々木も、くす、と笑う。

「たまにはこんなむさ苦しい男同士のクリスマスも良かるうよ、色

男くん」

「ん……」

佐々木は微笑んだ。

「最悪のクリスマスだと思ったけど……何かいい」

「そうだろう？ 基本的な脳の構造が同じヤロー同士も悪くないもんだろう」

「そういう事もあるかもしれない。けど……」

佐々木の目が潤んでいる。

「佐々木、すきっ腹にアルコールを入れすぎたな。料理はキャンセルして帰ろう」

俺は慌てて立ち上がった。下心は本当になく、次第に瞼が下がってきている佐々木がじき眠り込んでしまう事は明白だった。ウエイターに謝ってワイン分だけ支払い、佐々木に肩を貸して店を出る。

「あ、雪だ」

白い息を吐きながら俺は夜空を見上げた。いつの間にか雨が粉雪に変わっている。俺は、ふう、と溜め息をついた。

「この雪で何もかも綺麗さっぱり清められて忘れられないものかなあ……」

佐々木の失恋も、俺の恋心も。

雪が次第に強くなってきた。俺は急いでタクシーを呼び止めた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0397q/>

雪に願いを （現代もの）

2011年1月13日08時25分発行